



茅ヶ崎市教育センター

子どもたちのために
ともに教育環境を考える

教育センターの【年刊教育情報誌】

学びあう響きあう

第21号

令和7(2025)年 4月 発行

編集担当/茅ヶ崎市教育センター

所在地:茅ヶ崎市十間坂三丁目5番37号

研究研修担当(市青少年会館3階)

☎ 0467-86-9965

青少年教育相談担当(同館2階)

☎ 0467-86-9963

<https://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/kyouiku/1005049/index.html>

💡 教育センターでは、「教育研究」・「教育研修」・「教育相談」の推進をしています。

【【第21号Contents】】

教育情報誌バックナンバーのページからダウンロードできます!!

- P.1 令和6年度幼児期からの子どもの育ちに関する講座・講演会のあしあと
- P.1~5 幼児期の教育・家庭教育 ふりかえり
- P.6~7 茅ヶ崎市小学校中学校創意工夫・研究作品展のお知らせ
- P.8 青少年教育相談室から



令和6年度幼児期からの子どもの育ちに関する講座・講演会のあしあと

名 称	開催日等	講師(所属/専門分野)・内容等
第14回響きあい教育シンポジウム	7/26(金)開催	講師 <small>えんどう としひこ</small> 遠藤 利彦 氏(東京大学大学院教授/発達心理学、感情心理学) <small>きたじま あゆみ</small> 北島 歩美 氏(日本女子大学カウンセリングセンター専任研究員・教授待遇) テーマ「子どものチャレンジする心を育むための大人の役割～乳幼児期から思春期の子育ち・子育て～」 内容 講演及び講師・本市教育長による <small>ていごん</small> 鼎談
第21回乳幼児期の育ち・子育て講座	10/4(金)開催 【動画配信】 11/23~1/25	講師 <small>そのだ なつみ</small> 園田 菜摘 氏(横浜国立大学教授/乳幼児心理学) 講演 「ほどほどの子育て」
令和6年度茅ヶ崎市教育講演会	10/28(月) 【動画配信】 12/20~2/21	講師 <small>てしがわら まい</small> 勅使川原 真衣 氏(組織開発コンサルタント/教育社会学、組織開発) 講演 「能力主義の行きつく先には何があるのだろうか～「生き抜く」から「生き合う」へ～」
令和6年度幼児教育研修会	令和7年 1/10(金)開催	講師 <small>さくま みちこ</small> 佐久間 路子 氏(白梅学園大学教授/発達心理学) 講演 「こどもの『こころ』の育ち～発達に応じた大人のかかわり～」

～幼児期の教育・家庭教育 ふりかえり～ 15年目のあゆみ

令和6年度は上記の4講座・講演会が開催されました。その中から2つの講座を紹介します。

(令和6年度茅ヶ崎市教育講演会より)

能力主義の行きつく先には
何があるのだろう
～「生き抜く」から「生き合う」へ～
てしがわら まい
勅使川原 真衣 氏



「能力」「能力主義」って何だろう？

能力はこの目で見えません。あの人は能力が高いとか、能力が低いという言い方があるのは、同じ現実を見ている、自分の中で解釈しているということですね。つまり、評価をしているということなのだと思えます。能力というのは、自分の中の評価と必ず結びついています。まず、ここが大事なポイントです。

能力主義は時代の発明でした。近代以前は、日本には士農工商身分制度があり、農家の家に生まれるならみんな農家になりました。みんな願って頑張れば色々な仕事に就けるんだという職業選択の自由が、近代化の波で生まれました。土地や食料、お金でも何でもいいのですが、誰がどのくらいもらえるのかなど、社会の資源と呼ばれるものをどう配分するのかという点が争点になってきました。そこで生まれたの



が、「能力主義」です。

時代が変われば、求められる能力も変わるよねと言われます。しかし、時代は変わっていると思いますが、能力が本当に変わっているかということは、あまり分かりません。

人と人の組み合わせが大切

私は能力というものは幻だと思っています。目で見ただけでもありません。もっと言うと、能力は可変的、状況による状況依存的なものだというふうに考えています。誰と何をどのように行うか次第でその人となりというのは、容易に移ろうものだと思います。

例えば、会議の場で、あの人がいるとなんかうまく話せないみたいことはないですか。逆に言うと、あの人が席にいてくれると、なんか自分が面白い人間になったような気持ちが出て、楽しく話せるとか。誰がいるかによって、その人の出方というのは十分変わり得るということです。

個人に固定的に内在するかのよう な能力の前提という考え方を、やめませんか。家庭、学校でもいいですし、職場でもいいです。人と人、人と職務の組み合わせを見直していきませんか。

完璧な人間はどこにもいないですから、「あれが足りない。」「これが足りない。」というのは簡単に指摘できるのですが、全方位的な円に近づくような人間というのは、どこまでやったって、誕生しません。個人に良し悪しをつけて、「駄目な人は良い人になってください。未熟な人はもっと頑張ってください。完璧になってください。自立してください。」と

いうのは、無理があります。

個人の良し悪しを追っていると際限がないので、この組み合わせを調整していきましょうということが、環境調整という言葉だと思っています。

組み合わせを車に例えると・・・

2人以上が目的を持って集まれば組織です。ハンドル役っぽい人がいれば、タイヤ役っぽい人もいます。言われた方向にちゃんと走ってくれる人ですね。うるさく言うけどもあまりやらないみたいな人もいますじゃないですか。それが良し悪しというよりも役割なのだと私は思っています。けども、これが総じて走る車としてちゃんと機能していますか、機能が集まっていますか、というのを点検するのを組織開発と呼んでいます。

やっぱり目立つエンジンが、格好良いと言われたり、アクセルが優秀だと言われたりしがちです。しかし、走る車で考えたら、本当はブレーキがなきゃ困りますよね。よくあるのは、1つの組織にハンドルが4つも5つもついているケースです。組織で尖りのある変革人材を集めた新規事業は、こういうケースが多いです。これは、空中分解します。

自分のやろうとしていることに対して、点検していく。これが、能力主義ではない組織運営の方法なのではないかというふうに思っています。

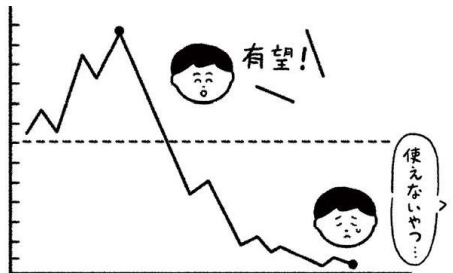


声の大きい人はクラクションかも知れませんが、クラクションはクラクションでいいんです。けれども、やっぱりおとなしくて実直な body があ

て初めて車として機能しますし、慎重で何かとリスクに気づくようなタイプの、ブレーキ役の方が存在してはじめて組織も暴走しないで済むというわけです。

「生き合う」ということ

「こんなことして。」とか、「そんなだから。」「お前は弱いから。」とかではなく、「ああそう思ったんだね、嫌だったんだね、じゃあどうしたらいいかな?」と一回受けとめるということが大切だと思います。「これくらい」というのは、やっぱり自分の尺度なんです。「そう思ったんだね。」とか、「大変だったね。大変なのによくここまでやったね。」と受け止めてもらう、こういう経験が大事なんじゃないかなと思います。それがあってはじめて、「生き合う」なのです。



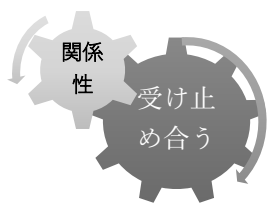
「生き抜く」という考え方だと、「I am OK. You are not OK.」「私はいいいけど、あなた駄目だよ。」って。

残念ながら教育は、特に指導をする側としての教員というのは、「I am OK. You are not OK.」「あなたも頑張ってください」というのが教育だったのではないかと思います。「I am OK. You are OK.」「僕もいいし、あなたもいいよね。」の世界感を広げていきたいなと思います。承認すると自分が上に行けないとか、下になってしまうということではないので、この「存在の承認の輪」を広げていきたいと考えています。

「脱能力主義」のポイント

【人と人、人とタスクの組み合わせ】

能力主義を軸に、これから10年20年30年先の社会を考えると、社会は多分もたないと思います。やっぱり高い能力や目立つ能力が評価されて、それによって、職業が決まったり、給料が決まったりということはまだ続いてしまうかもしれない。しかし、それに対して、「それだけがすべてではないよね。」と大人が言ってあげる。「世の中、能力の向上だけで回ってないよ、大丈夫だよ。」「ちゃんと組み合わせを選んで、関係性を見ながらやっているところも確かにあるから、少しずつ変わってっていくよ。」と言ってあげましょう。



でも今、地位の高いことがしたいとかそういう願望がもし

あるのなら、「能力主義で頑張った方がいいかもね。」と言う。何がしたいかによって、社会のからくりを伝えた上で、自己選択させる。それを応援する。でも「大丈夫だから。」って言ってあげられる大人でありたいなというふうに思っています。

うまくいかないことがあった時でも、「あなたの能力低いからじゃないですよ。相性が悪かったんだね。」と誰かに配置換えをかけ合ってみることも1つですし、かけ合っても変えられないときには、避ける場所を探してもいいと思います。命まで取られる話では絶対がないので、辞めたっていいと思います。組織の側で言うと、「能力低いからね。」ではなくて、「なるほど、やりにくいってことですね。どこだといいかちょっと考えてみましょうか。」と受け止めていく必要があると思います。この部分は働き方改革で短縮してはいけない時間だとも思います。

【傷を癒し、休むこと】

良し悪しつけずに、自分を受け止めてもらった経験が大切です。組み合わせを知り、組織開発の方法まで分かったとしても、受けて止めてもらった経験がないと、なかなか浸透しません。自分は良し悪しをつけられてきた、駄目だと言われてたという気持ちを抱えたままだと、それは傷付いている状態と言えます。傷はやっぱり癒さなければいけません。傷、例えばなんでしょう。



例えば、靴擦れを想像してください。靴擦れをしていたら、翌日同じ靴を履きますか？履かないですよ。痛いですよ。絆創膏を貼って別の靴を履きますよね。しかし、能力主義社会においては、それぐらい我慢しろと言われてしまうのです。もっと頑張っている人がいるからって平気で言われてしまうのです。ここで、当たり前前の原点に戻りたいと思います。痛いときは休む。ケアが必要なのです。

認めてもらった経験のない人は、人を認めることが難しい。「ああ、そう思っちゃったんだね。えー怖いんだね。みんな怖いことあるもんね。」と言える場、学校がそういう場であって欲しいなと思うんですよね。

学 校 の 役 目

時に駄目な自分、弱い自分を受け止めてもらう。家庭以外で受け止めてもらう場としては、学校ほどいいところはないと思っています。「先生あのね。」を聴く。つまり、良し悪しをつけたり、弱さだとか、強さだとか、個々人の違いを評価したりせずに、受け止め合う機会を学校に期待したいなと思います。

教育といえは、何かできないこと

を指摘してできるようにしてあげることではないと思っています。

誰も得をしてなさそうだし、みんな苦しんでいそうなのに、いつまで「あれが足りない。」「これが足りない。」ってやっているのでしょうか。私はこういう仮説をもっています。

「勝者」から変わる必要がある

今勝っている人が気持ち良いからなのだと思います。自分が今多くもらえている人は自分が努力してきたから、努力して能力が高いからと自己を正当化しています。能力主義というのは、誰が止めないかという、今得をしている人なんじゃないか、自分を含めただと思っています。今、少しでも余裕のある人に関しては、自分は能力主義のもと、特権をもらっていたのかなど、特権性に自覚的になるということだと思います。その特権も絶対に誰かのケア労働に支えられているはずなのです。「優越感を手放せないことがダサくないですか？」と言える社会であってほしいと思います。

「生き合う」社会のために

「多様性と包摂の時代だ。」「厚生時代の。」と言いながらも、能力主義を続けています。人に良し悪しをつけて、この人は多くをもらえて、この人は駄目だと言っているうちは分断なんじゃないのかなと思います。もっと人を良くしようと遮二無二なる前に、人と人の組み合わせや関係性を見直し、環境を調整することが大事だと思います。

いよいよ人口減少、経済的にも右肩下がり時代に、誰かを蹴落として自分は得したいと思っています。今やっていることは、本当に包摂になっているのでしょうか。この岐路に、私達は一人一人立たされているという気がします。

ほどほどの子育て

園田 菜摘 氏



育児はイライラするもの？

乳幼児を育てている親御さんに、「子どもといるとイライラしますか?」という質問をしてみました。何と日本の7割以上の親御さんが「子どもといるとイライラする」と回答しました。

一方、日本を含む先進国で「あなたの国は子どもを生き育てやすい国ですか?」という質問をすると、「そう思わない」もしくは「全くそう思わない」を合わせると、日本では61.1%もいたのに対して、フランス17.6%、ドイツ22.8%、スウェーデンは2.1%と非常に少なかったのです。

なぜ、日本の子育ては大変なの？

人間の子どもは、未熟な状態で生まれてきます。生まれてすぐに自分の足で立つこともできなければ、お母さんの母乳を飲むために移動することすらできません。

こんなに世話が大変な赤ちゃんを人類はどのようにして生き育て、子孫をつないでこられたのでしょうか。その答えは、『共同育児』です。つまり、1人の親が、手のかかる赤ちゃんを自分だけの責任で1人で育てる、という時代はどこにもなかったのです。昔から、人間は共同社会を作り、その中で多くの人達が子育てに関わ

る共同育児を行っていました。

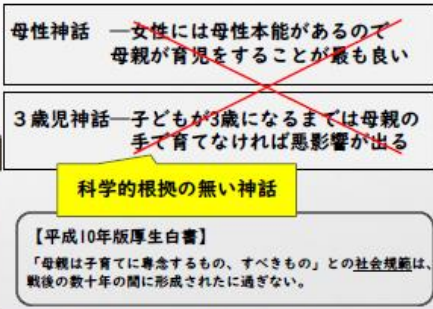
【母性神話・3歳児神話という誤解】

日本の子育てが特に大変な理由として、実は日本人のまちがった思い込みの問題があります。その1つ目が『母性神話』です。女性には母性本能があり、母親が育児をすることは子どもにとって最善である、という思い込みで、これを『母性神話』と呼びます。

もう1つが「3歳児神話」と言われるもので、子どもが3歳になるまでは母親の手で育てなければ子どもに悪影響が出てしまう、という思い込みです。どちらの思い込みも、実際には科学的根拠の無い『神話』なのです。

科学的根拠がないことが何十年も前から言われているにもかかわらず、今なお『神話』を信じている日本人が多いのです。

例えば、「厚生白書(平成10年版)」においても、「母親は子育てに専念するもの、すべきものという社会規範は、戦後の数十年の間に形成されたに過ぎない。」と書かれています。



戦後の復興のために、男性は外に出て働き、女性は家にいて子育てをする、という役割分業が始まったため、このような思い込みが広まったのです。

【養護性を母性愛と勘違いしない】

人が幼い子どもを見て、「かわいいな」と思う感情のことを『養護性』と言います。多くの人々がこれを女性特有の母性愛、母性本能だ、と読み違えて解釈をしています。

例えばアメリカですと、夫婦、パートナーは、幼い子どもがいても、子どもを

ベビーシッターに預けて2人で食事やパーティーに出かけていきますよね。なかなか日本ではそのような光景を一般的に見ることはありません。

「母性愛は女性だけにしかないので、母親が子育てに専念するのは当然」ということは、日本以外の国では当然ではなかったりするのです。アメリカでは夫と共同育児をしたり、ベビーシッターを活用したりするなど、子育てが孤立したものではないためか、子育てが辛いものとはあまり捉えられていません。

このように、育児を孤立させないことに子育てのヒントがあります。

ほどほどの子育てのススメ

① たくさんのサポートを受ける。

○物理的サポート

子どもの世話をする、一定の時間預かるなど、実際の行動のサポートを物理的サポートと言います。育てる側は自由な時間ができるので確かに助かるのですが、子育てにより効果的なのは、次のサポートです。

○情緒的サポート

子育てをしている人を心理的に支えるサポートを、情緒的サポートと言います。ありがちな例として、子育て中の母親に対して父親が「～してみたら」「～すればいいよ」といったアドバイスをすることがあると思いますが、実はこれは情緒的サポートには入りません。母親が、夫である父親に子育てで困ったことを話すのは、アドバイスが欲しいわけではなかったりするのです。情緒的サポートとは、子育てで大変だったことを話す母親に、「それは大変だったね」と声をかけたり、母親が「〇〇が心配だ」と言うなら「それは心配だね」と言ってあげるなど、相手の気持ちを理解し、共感することです。子育て中の人々が自分一人では無いと感じられることが、

情緒的サポートになるのです。

② 「こうある(する)べき」を捨てる。

子育てでは、上手いかないこと、理想通りにふるまえないこともあります。ただし、やってしまったことはもう戻りません。後悔ばかりしていると、どんどん自分に自信がなくなっていきます。「何であの時あんな態度を取ってしまったのだろう」「あんなことを、なんてやってしまったのだろう」と後悔するよりも、「今度は、もっとプラスのことをやろう」というように、次はどのようにすれば良いか前向きに考え、それを実践できるように自分なりに努力する方が、子どもにとってよほど良い関わりになります。

《子どもの生まれつきの特徴(気質)》

- 活発さ ○積極性 ○機嫌のよさ
- 敏感さ ○生理的なリズム など

子どもには生まれつきの気質があるので、自分の育て方のせいだと考えたり、その子の特徴を変えようとするのではなく、その子の気質を理解し、気質に応じた関わりをすることが大切です。

③ “子どもと共に成長する”意識

子育ては、大人(親)が子どもに教えなければいけないと思いがちですが、「この子に自分は教えてもらっている、学ばせてもらっている」という意識をもつことも大切です。

子どもへの関わり方のポイント

【子どもの「安全基地」になる】

大人(親)が見守っていてくれる、ここにいてくれる、もしくはサポートしてくれるからこそ、子どもたちは外の世界で色々な遊びをしたり、知らない場所に行ってみたり、色々な人に関わったりすることができます。子どもが周りの世界に興味を持って探索をするきっかけは、子どもたち自身に信頼できる大人(アタッチメント対象)という「安全基地」があるからなのです。

子どもは自分で自ら興味のある世界を探索して、自由に色々なことを試して、発達をしていくので、大人はそれを見守る安全基地であれば良いのです。

【シグナルがない時】

子どもが泣いている、というのは何か嫌なことがあったり、不安に思ったりして、安心感を得たいというシグナルです。それに対しては、「どうしたの?」と何があったのかを尋ね、「大丈夫だよ」「安心してね」「これが嫌だったんだね」と子どもが安心感を持てるような関わりをするのが、大人の「安全基地」としての役割になります。

実はシグナルがない時が要注意です。例えば、自分から絵を描くことを楽しんでいる子どもに「もっとこうやったら上手に描けるよ」とか、「こんなのも描いてみたら?」など、大人が“干渉”



をすると、子どものやる気を失わせてしまうのです。子どもが自発的に行動している時

には、それを見守ったり、もっと自発的に活動できるような環境を作ることで、子どもは持っている力を発揮し、発達していくことができます。

【しつけは理由を説明しながら】

子どもにしつけを行う際には、大人の言うことを聞かせることが大切なのではありません。子どもの自律を育てるためには、民主的なやり方で、理由を説明しながら教えるのが良いと思います。

子どもに罰や報酬を与えるようなしつけは、逆効果になります。「お父さんに言いつけるからね」とか、「そんなことする子は嫌い」と言うのは、子どもにとって罰を与えられたことになります。

また、「言うこと聞いたらこれをして

もいよいよ」などは、子どもに報酬を与えることとなります。この方法はその瞬間は効果があるかもしれませんが、しかし、これを繰り返していると、子どもは最終的に罰や報酬がなければやらない子に育ってしまいます。時間はかかるかもしれませんが、理由を必ず説明して、民主的に教えるということがポイントになります。

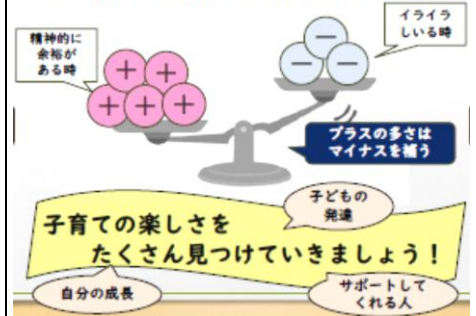
【子どものモデルになる】

大人が「ああしなさい、こうしなさい」と言うよりも、子どもは大人が実際にどう行動しているかを見ています。口よりも大人が行動している場面を見せた方が、子どもは「こういう時ってこうするものなんだ」と学ぶことができます。

完璧な子育ては存在しない

子育てでマイナスなことをしてしまったら、そのことを気にしすぎることも、プラスになることを一つでもできた方が良いと考えてください。実際の研究でもプラスの関わりが多いことがマイナスのことを補うことが分かっています。

《“完璧な子育て”は存在しない》



子育てのプラスの面に着目し、それをたくさん見つけるぞ、という気持ちで、たくさんの人にサポートして支えてもらいながら、子育ての楽しさを見つけてほしいと思います。

